

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第22号

平成20(2008)年3月5日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史資産調査会

事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内

〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1

TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



フェリス女学院10号館 写真撮影：安川千秋

エレガントな白いキューブ アントニン・レーモンド設計・フェリス女学院10号館

関 和明 (関東学院大学教授・横浜市歴史資産調査会調査委員)

山手の丘・カトリック教会の背後、山手公園に隣接するフェリス女学院の敷地に、白くて細長い矩形をした二階建ての清楚な建物が、芝生のグリーンを前にしてたたずんでいる。

フランク・ロイド・ライトの助手として来日したチェコ出身の建築家、アントニン・レーモンド(1888～1976)の設計により、1929年にライジングサン石油会社の社員用共同住宅として建てられたモダニズム建築。全体の構成をみると、建物の中央と左右に計四つの階段室があって、二階部分の両端に三個室をもつユニット、中央に二個室をもつユニット、それぞれ二つずつ計四ユニットが、左右対称に配置されている。一階部分はすべてのユニットも居間と食堂、厨房などの共有スペースが占める。「十人の速記者のためのフラット」というタイトルが記された設計図から推測すると、かつては、单身のおそらく若い女性たちが、それぞれ個室をもちつつ共同生活を行っていたのであろう。

この建物は、1920年代にヨーロッパを中心に展開された初期モダニズム建築とほぼ同時代に日本の地で実現された作品で、それらと共通するデザインが顕著である。たとえば、1926年、ドイツのデュッセルドルフの郊外に、当時最先端の芸術教育を行っていた造形学校「バウハウス」の教

員(マイスター)用アトリエ付き住宅として、学長である建築家、ヴァルター・グロピウスが設計した三棟の「マイスターハウス」などとのプランニング上の類似が連想される。こうしたデザイン、つまり、白い箱型の外観、大きな開口部、合理的なプランニングなどの特徴をもつ新しい建築の様式は、1930年代以降に「インターナショナル・スタイル(国際様式)」と呼ばれるようになった。

しかし、この建物をもう少し詳しく見てゆくと、単純に「モダニズム建築」の一事例として理解するだけでは十分でないことがわかってくる。たしかに、正面の外観は、一階の居間部分のゆるくカーブしたベイウインドウや両脇で前面にやや張り出したサンルームなどでアクセントをつけながらも、大きな開口部と水平に伸びる二階のバルコニー、フラットルーフという比較的シンプルな構成である。しかし、正面とは対照的に、背面は箱状のヴォリュームが組み合わされた凹凸の多い構成で、二階のテラスから屋上に昇る鉄製の螺旋階段や、水平屋根の上に何本も突き出た煙突などがあいまって、複雑な様相を呈している。室内も、全体としてはモダンな雰囲気やベースをしながら、ホールを中心とした各室のL字状配置、居間のマントルピースなど、「モダニズム＝単調・退屈」とならない工夫が随所に表れている。屋上の手

すり(パラペット)や煙突の上部を飾る明るいブルーとグリーンを軸としたタイルによる縁取り「装飾」なども目を楽しませる。

周知のとおり、アントニン・レーモンドは日本におけるモダニズム建築の展開に重要な役割を果たした建築家であるが、今年(2008年)が生誕120周年ということもあってか、2006年にはアメリカで大部の研究書が刊行され、昨年は日本でも大規模な展覧会が開催されるなど、再評価の機運が感じられる。にもかかわらず横浜に彼が残した作品の多くは、残念なことに近年急速に失われているのも事実である。

だが、この建物は、保有者であるフェリス女学院関係者による、建築の文化的な価値に対する深い理解と継承の意志に支えられて、幸いにもいままでも大きな改変がほとんどなされず維持されてきた。さらに今回の歴史的建造物としての認定を機会に修復されて、新しい使い方が模索されようとしている。すでに在る建物を使い続け、次の世代により良い形でバトンタッチすることは、新しい建物を建てるのに費やすのと等しい意志、建築のもつ力への理解があって初めて可能になる。この建物の前に立つと、そのことにあらためて気付かされる想いがする。

横浜市認定歴史的建造物を2件認定

ストロングビル

吉田綱市

(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

ストロングビルが認定歴史的建造物になった。この建物は、昭和13年に「ストロング・エンド・カンパニー」の横浜支店として竣工したもので、昭和17年から約10年間は敵産管理令によって大蔵省の管理下におかれたが、それ以外は終始ストロング商会の建物としてあった。外国商会の建物で創建当初の名前で存在し続けている珍しい例ということになる。ただし、昭和22年からは正確には「ストロング・エンド・カンパニー(ファー・イースト)リミテッド」という名前になっている。「ストロング・エンド・カンパニー」の名称となったのは大正5年だが、その前身のG・ストラウス商会が横浜に支店を設けたのは明治4年というから、実質的には明治の初期から横浜に存在した歴史ある外国商会ということになる。

この由緒ある外国商会の建物を設計したのは、横浜生まれ、横浜育ちの矢部又吉(1888-1941)。彼はドイツで建築を学んだ最初期の日本人建築家の一人であり、帰国後は

川崎財閥のお抱え建築家のような存在となって、全国各地に川崎銀行(昭和2年からは川崎第百銀行、昭和11年から第百銀行、昭和18年に三菱銀行に吸収合併)の本・支店を設計している。現在日本興亜馬車道ビルとなっている元の川崎銀行横浜支店(大正11年、旧日本火災海上横浜ビル)も、D'グラフォート横浜となっている元の川崎第百銀行横浜支店(昭和9年、旧三菱銀行横浜支店)ももちろん彼の設計になる。外国人の住宅もいくつか設計しており、その国際性がストロング商会の仕事につながったのであろう。ところで、施工だが、残念ながらいまのところはわからない。

この建物の外観の最大の特徴は、横浜公園から東のほうを見るときのアイストップ(人の視線を止める働きをするような景観上の重要な要素)ともなる大棧橋通り側のファサードであろう。一部地下階付きの鉄筋コンクリート造3階建ての建物だが、3階は2階の上のコーニス(軒蛇腹)とその下のややまばらなデン

ティル(歯形模様)によって屋階(アティク)のあつかいをされている。ファサードを引き締めるためだろうか。そのファサードの造形は、ファンライト(扇形欄間窓)とその上の半円形(内側に円形を含む)の軒先飾り(アンティクス)を備えた中央の玄関ポーチに収斂していく。総じてシンプルなクラシックというべきデザインであるが、いまは平坦に見えるファサードの壁も、往時は目地がもっとはっきりしていたようで、石積みのような印象がもっと強かったものと思われる。

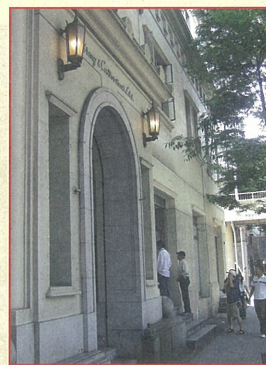
この建物は戦前の横浜の外国商社の希少な遺構であり、横浜ゆかりの著名な建築家の最後の作品であり、さらには横浜公園かいわいのヴィスタの中心的な構成要素でもある。大和ハウスによって新しく建てられる高層のホテルの低層部分に復原される予定だが、玄関まわりの石材や壁付き灯、それにファンライトやドア扉はそのまま使われ、窓のスチールサッシも一部に再利用されると聞く。あるいは

ファサードは、創建当初により近い雰囲気になるかもしれない。なお、ストロング商会は新しい建物の一部に残るそうで、ストロングビルの名前はまだ存続するという。

ともあれ、横浜ゆかりの建築家矢部又吉の大正期から昭和戦前期にかけての3つの仕事で、現地でも部分的とはいえ現物でしるべることになる。この3つに共通する造形的特徴は、くせのない大らかさといえるだろうか。多分それが、人々をして彼の作品の保存活用へと向かわせたのだろう。



ストロングビル



ストロングビル(玄関ポーチ)



ストロングビル(玄関ドア)

ストロングビル見学会開催

平成19年9月1日(土)・2日(日)、ストロングビル解体前で見学会が開催され、1700人以上の人々が訪れる盛況ぶりであった。見学者の中には以前ビルで働いていたひとなどビルにゆかりの人や、テレビの撮影などに使用された場所をなつかしむ人もおり、思い思いにじっくりと見学する姿が見られた。

また当日は吉田綱市氏(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)による現地説明が行われ、多くの人が熱心に耳を傾けていた。

今後、ストロングビルは平成21年度に低層部に外観を復



ストロングビル現地説明の様子

元したホテルへと生まれ変わる予定であり、復元後も市民に親しまれる建物となって欲しいものである。

中区・山下居留地遺跡見学会 明治時代の商館跡を発掘!

横浜市中区山下町の県立新ホール「神奈川芸術劇場」建設予定地で、幕末から明治時代に建てられた外国商館の建物跡や当時の道路跡などが見つかり11月24日(土)、一般向けの現地見学会が行われた(発掘調査:かながわ考古学財団)。

見学会では、居留地48番地「モリソン商会」、同54番地「イ



山下居留地遺跡

リス商会」、同55番地「コッキング商会」の基礎部分や、「駿河町通り」などの跡を解説付きで見ることができ、ドイツ製のタイルなどの出土品も展示されていた。関内地区では、これまで居留地の遺構が発掘されたことはあったが、これほどの規模での発掘は初めてのことであり、訪れた見学者を驚かせていた。



出土品(ドイツ製タイルなど)

市指定文化財(旧横浜生糸検査所附属倉庫事務所) 吉田鋼市 (横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

平成19年10月に、旧横浜生糸検査所の付属倉庫事務所が市指定文化財となった。日本の鉄筋コンクリート造建築のパイオニアで横浜ゆかりの遠藤於菟の設計、大林組の施工で大正15年5月に竣工。この倉庫事務所は長らく帝蚕倉庫の事務所として用いられてきたが、平成18年、この地区一帯の再開発計画に伴って森ビル株式会社の所有に帰し、最近では「北仲ブリック」の名で親しまれていた。「ブリック」の名が示すように柱の部分に煉瓦(タイルではなく、むくの煉瓦)が張っており、柱頭にはレリーフが施され、玄関にはオーダー柱が用いられている。かつての生糸検査所は、いまの国の第二合同庁舎の低層部となっているところに主たる庁舎があり、その背後に大規模な4棟の倉庫およびこの倉庫事務所があって、一大建築群をなしていた。第二合同庁舎建設の際に倉庫の一つが取り壊され、いままた再開発の対象となって、当初と同じ位置に同じ姿で残るのは結局この倉庫事務所1棟ということになりそうである。しかし、主たる庁舎は一応復元されているし、現存の3棟の倉庫のうち1棟は曳き屋して残し、もう1棟のファサードが復元されて、倉庫群としてあった感じも実感できるようにしようと努力されていると聞く。大いに期待しよう。



左 帝蚕ビルディング 右 帝蚕倉庫事務所(北仲ブリック)

馬車道大津ビル(煙突)の設計者・木下益治郎 二村 悟 (工学院大学客員研究員 工学博士) 戸田啓太 (ICSカレッジオブアーツ 工学修士)

馬車道大津ビルは、1936年に東京海上火災保険株式会社横浜出張所(以下、「東京海上火災の保険ビル」という。)として建てられる。1959年10月に大和興業株式会社の所有となるが、現在まで半世紀の間、設計者は不詳とされてきた。

今回の調査で、設計者として判明したのは木下益治郎である。1913年12月に東京海上の管轄課のトップとして勤務し、1930年12月に退職、同時に嘱託となり、亡くなる一年前の1943年9月まで在籍する。

2005年、設計事務所を営む友人の松山哲則氏(埼玉県在住)が木下益治郎(1874-1944)という建築家の史料を入手した。その際に確認されたのが、東京海上火災の保険ビルの史料5点である。

史料は、新築工事(年代不詳)・電気設備工事(昭和10年12月)・温水暖房装置工事(昭和10年12月)の各仕様書、新築工事概要書(昭和10年9月26日)、茶封筒(8月8日の消印)である。

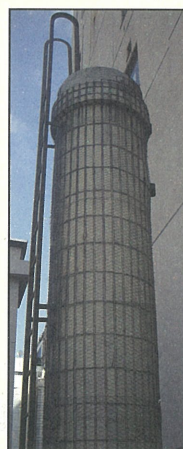
史料には、新築工事仕様書の表紙に「建築士木下益治郎之印」という角印、「木下」という訂正印が確認される。この角印と訂正印は、木下が関与した他の物件の史料のものと同じである。また、電気設備・温水暖房は、三機工業株式会社で、仕様書の表紙には木下事務所の所員・大田茂芳の捺印がある。

茶封筒は、宛先「横浜市中区南仲通り東京海上横浜出張所建築場 星野義喜殿 図面在中」、裏の差出人に「丸ノ内東京海上ビル旧館六階木下建築事務所」と書かれる。この星野義喜は、当時、東京海上の管轄課に在籍していたことが確認されている。



馬車道大津ビル

東京海上火災の保険ビルは、外観を横浜市認定歴史的建造物として保全対象としているが、実は地下に残る竣工当初の浄化槽は貴重である。日本で初めて本格的な浄化



馬車道大津ビル(煙突)

槽が設置されたのは、木下益治郎が現場監督を務めた丸之内・東京海上ビルディング旧館(1918年竣工)である。大正から昭和初期にかけて浄化槽技術は革新し、その時代の仕様の変遷を知る上でも、現存する東京海上火災の保険ビルの浄化槽は非常に貴重な例である。

木下は、現存する1936年竣工の日本郵船ビルの竣工写真にも顔を見せている。今回、発見された史料とともに、東京海上での活躍も含め、馬車道大津ビルの設計者が木下益治郎であったことは間違いないといえる。



馬車道大津ビル(地下マンホール)

二代目横浜駅基礎等遺構の公開

昨年の第21号の本紙で、認定歴史的建造物として紹介した基礎等遺構がマンションの公開空地として整備され、だれでも見られるようになった。場所は、旧東横線高島町駅前にある。

この遺構が発見された時、正直、開発により取り壊されるだろうと思っていたが、幸運だったのは、このマンションの事業者が地元の企業であり、横浜の歴史を大切に思ってくれたことである。さすがに、事業で赤字を出すことはできないので、横浜市の市街地環境設計制度の適用により、建築物の高さ緩和を受けたが、逆にこの制度により遺構部分

の空地が、公開空地に指定され、だれでもこの基礎遺構を目の前で見ることができるようになった。

さらに、このマンションのエントランスには、日本で初めて鉄道が開通した際に敷設されたレールが展示されている。今回の遺構と一緒に出土したもので、不要になったレールを、コンクリートを打つ際の補強材として活用したらしい。こちらは、マンション内にあるので自由に見られるものではない。

4代ある横浜駅のうち、現在の横浜駅を除き唯一残された遺構。是非、立ち寄って見て欲しい。



二代目横浜駅基礎等遺構

横浜から21件「近代化産業遺産」に認定

— 経済産業省 —

経済産業省は平成19年11月30日、幕末から終戦にかけて日本の産業発展に貢献した歴史的な工場跡や港湾、鉱山など575件を「近代化産業遺産」に認定したと発表した。

産業遺産は、文化財や都市景観などとは別の「国内産業への貢献」という観点から専門家が選定。「貿易」「石油」「繊維」といったテーマごとに、歴史的意義などを関連付けした33の遺産群にまとめた。

横浜市内からは近代化産業遺産に、横浜港や京浜工業地帯の関連施設、ホテルニューグランド本館など21件（一部重複）が認定された。すでに指定や認定をされている建築物のほかに、新港ふ頭の施設である「50トン定置式電気起重機」や、京浜工業地帯のインフラ施設としての「JR鶴見線」などが認定されているのもひとつの特徴といえる。

なお、市内で認定された近代化産業遺産は次の通り。

欧米諸国に比肩する近代造船業成長の歩みを物語る遺産群、2件

日本丸メモリアルパーク

ドックヤードガーデン

外貨獲得と近代日本の国際化に貢献した観光産業草創期の歩みを物語る遺産群、1件

ホテルニューグランド本館

「貿易立国の原点」

横浜港発展の歩みを物語る遺産群、17件

象の鼻地区

新港ふ頭

旧臨港線護岸など

赤レンガ倉庫

新港ふ頭の港湾施設

横浜第二合同庁舎低層棟外壁

横浜税関



日本丸メモリアルパーク・1号ドック

県立歴史博物館

県庁本庁舎

横浜市開港記念会館

横浜開港資料館旧館

横浜情報文化センター

ホテルニューグランド本館

氷川丸

日本郵船歴史博物館の収蔵物群

日本丸メモリアルパーク

ドックヤードガーデン

「重工業化のフロントランナー」

京浜工業地帯発展の歩みを物語る遺産群、4件

JR 鶴見線

電気の資料館の送電遺産群

日産自動車横浜工場一号館など

日本ビクター第一工場ファサード



50トン定置式電気起重機



JR鶴見線「国道駅」

ホテルニューグランド 80周年を迎える

「ホテルニューグランド」が平成19年(2007年)12月1日、開業80周年を迎えた。ホテルニューグランドの開業は、まだ復興が進んでいない昭和2(1927年)12月1日。当時の有志一横浜市長が臨時復興委員会に「ホテル建設計画」を提出したことを発端として実現、昭和5(1930年)に開園した山下公園とあわせて、横浜の震災復興のシンボルとなった。

『霧笛』『鞍馬天狗』の作者である大佛次郎が執筆活動をしていたことや、昭和20(1945)年にダグラス・マッカーサーが3日間滞在したなどのエピソードを持つ。

「ホテルニューグランド旧館」の設計は渡辺仁。施工は清水組(現清水建設)。平成4(1992)年に横浜市歴史的建造物に認定。なお、平成19年には「近代化産業遺産」に「外貨獲得と近代日本の国際化に貢献した観光産業草創期の歩みを物語る遺産群」及び「貿易立国の原点」横浜港発展の歩みを物語る遺産群」としても認定されている。



開業日当日玄関前にて



ホテルニューグランド

歴史を生かしたまちづくりセミナー30 「横濱三塔物語」開催報告

平成19年3月10日(土)第30回歴史を生かしたまちづくりセミナーが、神奈川県民ホールで開催された。(主催：横浜市・横浜市歴史的資産調査会)

今回のセミナーは、吉田綱市氏(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)を講師に迎え、横浜三塔と呼ばれる神奈川県庁(キング)、横浜税関(クイーン)、横浜市開港記念会館(ジャック)についての講演を行った。講演終了後、NPO法人横浜シティガイド協会のガイドにより三塔、および三塔を一望できるスポットを巡るガイドツアーを行った。神奈川県庁では屋上から周辺の景観を楽しみ、開港記念会館では螺旋階段を上がり、一般公開されていない塔の内部を見学した。30回という節目にふさわしく、116名という過去最大規模の参加があり大盛況であった。



セミナーガイドツアーの様子